

あびこの文化

発行人
美崎 大洋
我孫子市
高野山
250-23
04(7182)
0861

まん延防止再延長

千葉県は4日、新型コロナウイルス対策の「まん延防止等重点措置」について、県内全域で今月21日まで再延長することを正式に決めた。会食を4人以内に制限するといった基本的な対策は継続する。

熊谷知事は「日々の感染者数は依然高い水準にあり、減少に転じたとはいえない」と延長の理由を説明した。県は、重点措置の解除を模索してきたが、確保病床率が62%と高止まりしていることなどから延長する判断に至った。

重点措置延長で飲食店への時短営業の要請なども続くが、濃厚接触者の感染経路は、同居する人が67.5%に対し、会食が感染源の事例は0.7%と少ない。

講演会「各地の将門伝説・伝承を探る」を実施

コロナ感染者数高止まりと前日降雪の中 70名余が参加

2月11日(金)、あびこ市民プラザホールに於いて掲題の講演会(将門シンポジウム)を実施した。本来、この講演会は2021年11月に実施される予定であったが、3か月遅れとなり、結果として2021年度「市民のチカラまつり」の締めくくりのイベント(企画部門講演会)となった。

昨年、ウイルス感染の第5波が落ち着きをみせた時期に一旦講演会会場が決定していたが、「平将門」をテーマにすることで通常の講演会より多くの参加者が予測されたため実施日を変更し、より大きな会場(市民プラザホール)を確保した。しかし昨年末から新たに現出したオミクロン株の感染者が急速に拡大し、実施日前後が第6波のピークになり開催の実現が危ぶまれた。それでも我孫子市の広報紙「広報あびこ」2月1

日号に講演会の記事が掲載されると広報を読まれた市民から約20件の申し込みの電話があった。広報には「事前申し込み制」とは書いていなかった(先着100名と掲載)にも拘わらず、掲載当日に申し込みが殺到したことに、改めて将門人気を思い知らされた。同時にあたかもコロナ禍を心配していないような市民の豪気にも驚いた。主催者としては会場の市民プラザ側とも事前に入念な感染対策の打ち合わせをするつもりにも開催日に向けて感染予防にも十分な配慮をし準備を進めた。お

開催日当日は前日の5cmの降雪で参加者の出足が鈍ることを危惧したが、開始時刻には約70名の参加者が会場に集まった。

講演会の開催日の変更とは別に、実は講演会の企画内容にも大きな変更があった。当初は各地に残る将門伝説・伝承について周辺各市から将門に詳しい演者と呼んで発表・主張して貰い、その後お互いに複数の相手に質問あ

るいは疑問点の指摘を相互に行う、いわゆるパネルディスカッション形式を想定した。その企画を持つて各市を訪問又は打診したところ、「それでは参加しない」「参加できない」「との返答があり、協議の結果、最終的に各市からの発表とさらには観光PRの目的で実施することになった。



机を前に勢揃いした当日の講演者

各市とも将門伝説・伝承についての記録や資料も保有しPRにも努めてはいるが、事前打ち合わせを通じて分かったことは、これらを維持・継続していく体制や専門家を含めた市民との連携が十分になされているとは見えなかったことだ。例えばかつて将門専門家と呼ばれた人の高齢化や後継者不在などもあり、図らずも各市の抱えている課題を垣間見るようになった。

最後になるが、今回の講演会にあたり「市民のチカラまつり」主催者側からは会場費用、講師への謝礼を提供して頂いたことをお礼と併せて報告する。

平将門シンポジウム

「各地の将門伝説・伝承を探る」を聴講して(報告)

稲葉 義行

我孫子の文化を守る会では、各地に残る平将門の史跡及び伝説を各市の関係者にお話を伺おうと企画し、令和四年二月十一日に平将門シンポジウムを開催しました。

参加した団体は、坂東市・取手市・柏市及び我孫子市の方々と、守谷市は資料配布で参加して頂きました。

まず、主催者である我孫子の文化を守る会の美崎会長(写真)から「今回我孫子市で将門シンポジウムを開催したのは我孫子市及びその周辺の各市には将門に関する伝説が数多く存在しており、それらを披露して頂きたいと思い開催いたしました。」との挨拶の後、基調講演として市川市立市川考古博物館学芸員山路直充氏より『将門記』辛島(さしま)の道について講演をして頂きました。



山路講師は、令和三年十二月十七日の我孫子市史研究センターの講演で「将門記」にある王城の地を具

体的には松戸市小金原から流山市向小金付近に推定し、その地が関東地方における東西の水上交通の結節のみならず南北の陸上交通の結節となることを述べておられます。その過程で南北の連絡路を十一世紀の相馬御厨の西限を示す東大路に求め、「将門記」に記される「辛島の道」に関わるとされました。今回は、この「辛島の道」について所感を話されました。「辛島道」は平将門との戦に勝利して、本拠地の上総国へ戻る路線の呼称であるとしています。「将門記」では、九三七年(承平七年)八月に起きた平将門と伯父平良兼の戦いで、八月六日良兼は上総国・常陸・下総両国の境子飼の渡しで合戦、勝利し七日には将門の本拠下総国豊田郡来栖院常羽御殿と百姓の宅居を焼き払った。十七日豊田郡堀津渡で将門が待ち構えていて合戦、良兼が勝利した。十九日良兼・辛島の道を取りて上総国に渡る」となっています。講演では当時の地図で、良兼の進軍と帰還の行路の説明がありました。良兼進軍の行路は子飼渡から来栖院常羽御殿・堀津渡と西に進み東に戻っています。帰還は豊田郡で戦闘し「辛島の道」を通過して上総国に帰還しています。帰還路には将門のもう一つの本拠石井(いわい)宮所(猿島郡石井郷)があり、猿島郡縦断路線は高リスクではあるが、良兼は下総介で郡衙は国司の権限が及ぶため、その後援で郡内を通過し(戦勝の誇示もあり)、下総国府から東京湾岸経由で帰還したと思われる、との内容でした。暫時休憩の後、各市に残っている将門に関する史跡、伝説を発表して頂きました。

坂東市から

まず、坂東市の秋森裕之氏から説明がありました。坂東市の史跡として将門を祭神とする國王神社は将門の三女(如蔵尼)が父の三十三回忌に父の姿を刻んだ座像(県指定文化財)が「神体」なっている。延命院には将門の胴塚があり、東京大手町の首塚より送られた石塔婆が建てられている。また、将門が水に困っているとき、老翁が水を提供してくれたという伝説がある石井の井戸やその老翁を祀っている一言神社等将門にまつわる史跡伝説が数多く残っている地域で、毎年十

一月には将門まつりを開催したり、観光ガイドマップで「平将門公ゆかりの地史跡めぐり」を紹介するなど市を挙げて将門のイメージアップに力を入れている地域です。

取手市から

次に、取手市は取手について埋蔵文化財センターの飯島様が、将門にまつわる伝説について紹介しました。生誕伝説では「尊卑分脈脱漏」では、将門の父良将の妻(将門の母)を大養春枝(いぬかいのはるえ、又ははるえだ)の娘としている。また、「万葉集巻二十」に出てくる下総国防人部領使(さきもりことりづかい)少目県犬養宿禰浄人の子孫が大養春枝とし、大養氏は相馬の豪族で、相馬郡の中心地である現取手市寺田本郷に住んでいた。大養春枝の屋敷も寺田にあった。お産の時に女性はある家に戻るので、将門は取手で生まれた、という伝説である。また、変わった伝説では、将門は現取手市米ノ井にある竜禅寺三仏堂で生まれた。母は大蛇の化身で、生まれた将門の全身を舌で舐めまわしたため、将門の体は刀でも切れず、矢も刺さらない鋼鉄のようになったが、こめかみの所だけ舐め忘れた。そのため将門はこめかみを矢で射られて討ち死にした、という伝説も残っている。これはギリシャ神話のアキレスの話と似ており興味深いと思いました。また、将門の愛妾である桔梗御前についての伝説では、将門が討ち死にしたので、桔梗御前は米ノ井まで落ち延びてきたが、追つ手に捕まり切られたので、人々はこの地に桔梗塚を建て菩提を弔った。この地では、桔梗の花は咲くが実はつけない。または、桔梗の花は植えてはいけない等の話が伝わっています。また、桔梗塚については別の伝説として桔梗御前は取手市岡の台地上の城に住んでいたが、将門討ち死にの報に接し、前途をはかなんで入水して果てた。その亡骸は米ノ井の辺りに流れ着いたので、米ノ井の人々は亡骸を引き上げ桔梗塚に葬ったという話ですが、これは、前の伝説と合体したものと言え、現在でも将門にまつわる伝説が新たに生まみ出されている一例といえます。反将門伝説では、平貞盛が父国香の菩提を弔い慈眼寺を建立した。あるいは

は安楽寺には国香の供養塔と伝えられる宝篋印塔(ほうきょういんとう)を建立した(実際は十四世紀頃(鎌倉時代末期)と考えられる。)という伝説も紹介されました。

我孫子市から

次に、我孫子市からは当会の戸田七支氏が「伝説と将門記よりその居館と王城の所在地を探る」と題し講演を行いました。まず、我孫子市にも諸々の伝説があり、伝説には表と裏があり、伝説の成立過程を見るとこれらの伝説がことごとく将門の本拠地が我孫子であることを示している。その第一は将門神社の起源の謎で、天慶三年将門が戦没するや、その霊は遺臣らと対岸の手賀村明神下より手賀沼を騎馬にて乗り切り湖畔の岡陵に登り、朝日の昇天するのを拝した処へ祠を建てたとあるが、何故岡の中腹で朝日を拝んだのか? 伝説をよく読むと朝日を拝むという行為はなかったことが判る。霊魂がそうしたことをする訳がない。しかし、村人が祠を建てたことは事実である。勝手気ままな場所へ祠を建てたとは思えない。将門の居館から六百メートル、風光明媚な場所である。別邸、客殿の跡と考えられる(浮世絵が神田神社に所蔵)。その二は日秀観音が将門の守り本尊である。(将門が近くに住んでいたか?)、印西市竹袋、取手市戸頭にある愛妾桔梗御前の供養塔の存在(愛妾が近くにすんでいたか?)、その外桔梗を植えても花が咲かない・影武者の見分け方を敵方に知らせた・将門を裏切った・嫁入り衣装に桔梗柄のものを持ち込まない(これらは本妻が桔梗御前を受け入れていなかったのではないか?)、布施弁天が将門によつて焼かれた朝廷の勅願寺となっている等多くの伝説が残っている。将門の居館・王城の所在地を示す記述は、坂東市本将門記八十四ページに「其記文に曰く、王城を下総国の亭南に建つべし。兼て横橋(うきはし)を以て号して京の山崎為、相馬の軍大井の津を以て京の大津為む。」とある。これを以て王城は相馬郡衙正倉遺跡(我孫子市日秀四十番地)、将門亭は湖北地区公民館、横橋は郡衙正倉遺跡下の入り江(我孫子中里字久保田百六十四番地)、

大井の津は柏市大井大津川の河口付近と提言しています。最後に、将門は朝廷に反逆したとして関係者が大勢誅殺されています。これらの人々を鎮魂するうえで将門神社ほど相応しい処はないと思います。江戸城・神田神社・将門神社は北東(丑寅)の方角に一直線に並んでいて、新しいパワースポットが誕生するのは？と講演を結んでいます。

柏市から

「一柏に残る将門伝説―日本の三大怨霊の一人にして庶民のヒーロー」と題して、市教育委員会の小河原様が講演しました。「成田山は有名な観光地だから、バスツアーの途中で立ち寄ることはあるが、自分達は将門様の敵である

お不動様には、お参りはしないし、お土産も買わない。」(柏市岩井の古老の話)のように昔からそのような話が残されています。将門は一族の領地争いを発端として朝廷に反乱し、討ち死にの後京都でさらし首にされると、伝説ではその首は故郷に向かつて空を飛び、途中、今の東京大手町で力尽き、落下したとされています。その後も、様々な伝説が広まり、菅原道真・崇徳上皇と並ぶ三大怨霊として鎮魂のため、そして霊験にあやかろうととして神として祀られ



るようになりました。

市内に残る史跡・伝説を紹介します。柏市岩井にある将門神社は、将門を祭神とし、社殿は小型ながら周囲に施された「放れ駒」など趣のある彫刻が目を引きます。内部には七枚の棟札が収められており、正徳四年(一七一四)の拝殿竣工の様子がわかります。隣接する龍光院(真言宗豊山派)には将門の娘である如蔵尼(によそうに)が、将門と一族を弔うために祀ったとされる地蔵尊があります。如蔵尼は江戸時代、将門の敵討ちを企てる妖術者「滝夜叉姫」のモデルとして、浮世絵・江戸読本などに取り上げられた人気の人物です。柏市大井にある「車ノ前五輪塔」は側室車ノ前が遺児と共にこの地に隠れ住み、将門の菩提を祀ったという伝説が残っています。しかしこの五輪塔は特徴から建てられたのは室町時代初期(一四世紀中葉)一五世紀初頭と考えられます。柏市布瀬にある「高野館(こうややかた)」は高野御殿とも呼ばれ、地元では将門の館跡の一つと伝えられてきました。将門は館のある布瀬から手賀沼対岸の日秀(ひびり)・我孫子市)まで水上を馬で駆けたという伝説が残っています。将門が反乱を起した際、朝廷は全国の寺社に乱が早期に収束するよう、祈祷・調伏を要請した際、成田山がこれに応えたため、将門を敬う藤ヶ谷の地区の人々は成田不動を参拝することなく、同地区内の持法院にて独自の不動尊を信仰していました。また、柏市布施にある布施弁天には、将門は父良将と紅龍との間に生まれたという伝承が残されています。

将門は下総国亭南に「王城(都)」、相馬郡大井に「津(港)」を造ったという記録が残されています。しかし、その二百年後の歴史書では王城の地がいつの間にか相馬郡に代わります。そして、詳細不明だったその有力候補地の一つとして、柏市大井が挙げられるようになってきます。一説には、後に将門の子孫と称し、後継者としてこの地一帯を治めた相馬氏が、自らの統治の正当性や権威付けのため、史実操作を行ったのではと言われています。最後に、柏に将門の王城があったという証拠は見つかっていませんが、将門が柏の人々の心

に残り続けていることは間違いないようです。

以上、講師の皆様には、将門に関する伝承等をお話いただきましたが、わたくしとしては、これほど多くの将門に関する史跡・伝説があることに、驚いています。この貴重な地域資産を地域の活性化に役立てていきたいと思っています。

市民のチカラまつり2021

我孫子の文化を守る会の講演会に参加して

市民のチカラまつり企画委員 中條 信三

2022年2月11日(金)に我孫子の文化を守る会主催で市民のチカラまつり企画部門の最終イベントとして「各地の将門伝説・伝承を探る―将門の本拠地はどこだ!」と題した講演会が市民プラザホールで開催され、本年度の市民のチカラまつり企画委員として参加しました。将門人気は相変わらず根強く当日は70名を超える参加者があり盛況でした。

当日の会次第は第1部「将門記・辛島の道」について山路直充氏(市立市川考古博物館)の基調講演があり続いて第2部に坂東市・取手市・柏市・我孫子市から「地元の将門伝説・伝承」についてプロモーションビデオやプロジェクトを使用し各市独自の趣向を凝らした「わが町こそ将門の本拠地である」ことを力説した解説があり第1部、第2部ともとても有意義な内容でありました。

この講演を楽しみにしていた者として非常に興味深い話ばかりでこれまで以上に将門の神秘的な象徴に聞き入り大いに参考になりました。

「市民のチカラまつり2021」を締めくくるのに相応しい企画イベントであったと思います。

「平将門シンポジウム 講演・報告会」に参加して

牧田 宏泰

2月11日午後、あびこ市民プラザ・ホールにて、「市民のチカラまつり」の一環で、当会「我孫子の文化を守

る会「主催にて、表記の催しが開催された。以下にその感想を記述させていただく。

本来、昨年開催される予定の催しも、「新型コロナウィルス」蔓延が収まりを見せない中ではあったが、万全の対策実施、施設のご協力をいただく中、入場人数を制限し、「平将門伝説」に関わりが深いと声を挙げている近隣地域「坂東市・取手市・我孫子市・柏市」の関係者の報告と守谷市の資料参加と将門研究に力を注ぐ市川市立考古博物館・山路直充氏を迎え、基調講演をいただき開催された。講演・報告者を除き70名余の予想を上回る来場者の下、盛会となった。

1. 基調講演について

皮切りは、「将門記(しょうもんき)……辛島の道について」と題した山路直充氏の講演。先般開催された我孫子市史研究センター主催の歴史講話の会にて取り上げた「将門記」王城の地 下総国亭南についてで特定した「王城の地への連絡路」に焦点を絞ったテーマ。内容はかなり細部に踏み込んだ氏の見解が述べられたが、内容は平将門の全体像俯瞰には難しさがぬぐい切れなかったことに、小生には悔いが残る。(注)山路氏資料に辛島(さしま)猿島(さるじま)の記述あり。

2. 近隣各地の報告について

2-1 坂東市

平成28年に独自に公開した「坂東市本「将門記」を記念し、将門伝説を取り上げた企画展を開催するなど、以前より将門研究にチカラを入れている同市。今回は3名の職員の来場。代表して秋森裕之氏が報告DVD映写による「将門に因む史跡や場所の解説、観光パンフレットの配布など、「将門の事なら坂東市！」を印象づける内容だった。

2-2 取手市

同市の埋蔵文化財センターの飯島章氏が「取手市に残る将門伝説・伝承」と題して講演。先ずは「将門生誕地伝説」に「将門の母(相馬郡の豪族の娘)が実家の寺田・現取手市で将門を産んだ」との伝説は、「尊卑分脈脱漏」や「万葉集」がそれを裏付けると強調。また、

地域の「東漸寺」、「八幡宮」を将門が崇拝したこと。次に「将門の妾・桔梗御前伝説」にて、御前を「岡の台地」に「藤代川の合戦伝説」「反将門伝説・現竜ヶ崎市の寺社」などの取手市近隣に因む諸説を紹介。各種「史料」や地域の重要文化財・史跡紹介に踏み込み、さらに取手市と将門の関連性について、熱のこもった説明であった。

2-3 我孫子市

当会本拠地・我孫子市が「将門」の活動の本拠地は我孫子である」と自説を展開する戸田七支(とだかずゆき)氏は「伝説と将門記より居館と王城の所在地を探索」と題しての講演。「将門シンポジウムはなぜ我孫子で開催されるのか」と「我孫子に濃厚な伝説が存在すること自体が史実であり重要」に始まり、「伝説の成立過程に将門の本拠地我孫子をももの語り、《将門記にある「王城を下総国の亭南に建つべし」の記述「将門の居館と王城の所在地」ではその所在を具体的に、例えば「王城：相馬郡衙遺跡を現我孫子市日秀(ひびり)40番地、「将門亭：居館」を同市中里81番地3号と特定するなど、将門に因む場所を提言。「将門の本拠地は我孫子」説の強調が印象的であった。居館に近く位置する「将門神社」草創についても触れられた。

2-4 柏市

市職員の小河原博志氏が「柏に残る将門伝説」と題した市内の学校などに配布されている資料をもとに、スライドを併用し、「日本三大怨霊の一人にして庶民のヒーロー」と将門を位置づけ、柏市を将門の拠点の地「坂東市」にほど近い所と紹介。同市・岩井にある「将門神社」、同様に大井の「車ノ前五輪塔・将門側室の墓」、「高野館(こうやかた)」、「布施弁天」などに触れながら、「王城の地」は、その証拠は見つかっていないものの有力地として、同市「大井」が挙げられているとの締め括りであった。

2-5 守谷市

同市の「平将門伝説」、「文化財」関連資料配布に留まった。

「平将門」を語る本日の「シンポジウム」はこの地域に於いて、将門論義がますます盛んになる「手応え」を感じた。

講演を聴いてー参加者の声

こんなに沢山将門伝説があるのを知り改めて驚きました。我孫子市だけでなく近隣の坂東市、取手市、柏市にも声をかけての幅広い方のお話も聴けて大変良かったです。いい勉強をさせて頂きました。ありがとうございます。(Y.T)

我孫子の文化を守る、という観点なら将門はいささか広範囲かと。坂東市の将門祭り、キャラクター将門クンなど先行感がありました。

江戸初期に関東統一の先駆者と将門が評価されたことから神田明神が江戸総鎮守になり、歌舞伎の題材になったことや怨霊首となった怨霊のわけなど話があっても良かったかな。

街道の重要性は江戸五街道でも明らかで、猿島の街道の説明は、同じ街道を引き返した理由など聞き良かった。基調講演が専門的というより、守る会の趣旨に合ってたかなという印象でした。

事前にかなり将門について調べて行ったので、こんな感じです。来場者の中には領いている人もいて、市井の将門研究家もかなりいるもんだと思いました。

安倍晴明が登場する陰陽師でも、京を不安に陥れる将門の怨霊が取り上げられています。この怨念の理由を今度調べてみますが、歌舞伎の影響かも。

将門でまちおこしでなく、歴史愛好家の我孫子愛を将門ゆかりの市内の史跡や伝承を通して表す、というのはいいいと思います。(O.Y)

私は将門と秀郷の足跡を追って20回以上走り回りました。

今回の講演会で、守谷【正しくは取手市】の方だったかと思いますが、彼等の足跡を追った話は、すごく興味が湧きました。史跡は訪ねれば、見ることができ、いわれも大体説明があり、素人にも知りやすいのですが、足跡は仲々分かり辛いと思います。こう言う話が聞けると、嬉しいですね。(S.S)

【一】内は編集者

基調講演は確かに専門家向けでしたね。一般向けのイベントとしては、将門伝説に関する発表に絞った方が分かりやすかったかもしれません。真偽は別として、色々な伝承が各地に残っているという事実が興味深かったです。

もう一つ感想ですが、明治時代には、将門は朝廷に背いた悪人として扱われたとのこと。史実は変わらなはずなのに、解釈や評価は、時の権力者やその時代によって変わりますよね。将門の伝承や伝説をきっかけとして、中学生、高校生も含めた若い世代が参加したくなるようなシンポジウムにして、歴史の見方は一つではないこと等もさらりと伝えられるといいのかなと思いました。(KM)

大河ドラマ「風と雲と虹と」の平将門像と

そのエピソード

芦崎 敬己

今回の平将門シンポジウムで将門公の理解を深めるため、主催者側の一員として資料を検討していたところ、昔、平将門を描いたNHK大河ドラマ「風と雲と虹と」で原作者の海音寺潮五郎氏自身が平将門の人間像を語っていたのを यूチューブ で見ました。



この大河ドラマは、今から四六年前の昭和五一年に放映され、第一回が一月四日に「将門誕生」と題して、原作者が冒頭で平将門を分かり易く語っています。この部分の文字の資料が無いので、筆者が映像を見ながら書き起こして、当日の配布資料にしました。(以下その配布資料内容)

海音寺潮五郎氏の将門像

非常に素朴な坂東武者と言う感じが先ずしますね。正義感の非常に強かった男であろうと思います。

結局、情勢が彼を革命児にしまったんですけれど、あの時代としてはこんなに人間の考え方が違い

ますから、容易に革命に突っ走ると言うことはなかった筈ですね。将門が出たために藤原純友が出てくるという感ですね。

それから将門と言う人は、大日本史が彼を叛臣伝の中に入れて、水戸史学が彼を叛臣とした訳ですね。それ以前も色々ありますが、それは京都公家から見た見方ですから、必ずしも正しい、公平な見方とは言えない。

一般の庶民は、将門をどういう人物にしていたかと言いますと、明治以前の関東において、明神と言う神号を持った神社の殆んど全部は、将門を祀つたものだった訳で、藤原氏の政治に対する是正を求めたのですから、こんなに我々が考える謀反と言うようなものではないと思います。

それから、神田河岸の傍の国税庁の近くに将門の首塚がありまして、昔からあれに触ると祟ると言われており、こんなに何でもそのまま大変綺麗に残してあります。占領中に米軍があれを撤去しろと言つて、何か遣り掛けたら変なことがあったので、そのままにまたなつたと言ひ伝えがります。

将門の首は、色んな説がありまして、京都に運ばれたという説もある。それから空中から飛び帰つて来たという説もある。それから将門の死んだ所もこれから先に出てくる最後の戦場で死んだのではないんだ、もう一回逃げて死んだんだという、それを伝えている地方が関東には方々にあります。

死なせたくないう気持ち、そういう気持ちが伝説を作つたのでありましょうし、また、将門の一族が逃げて行つて、そこで発見されて死んだとか、そういうことが長い間に伝説になったんでしょうけれども、兎にも角にも将門を死なせたくないう気持ちがある当時の関東の民衆にはあつた筈ですね。(反訳・文責 芦崎敬己)

文字化における疑問点

この資料をまとめるときに筆者の知識不足と氏の言葉が聞き取り辛いことで、文字の書き起こしに不明点が二つありました。

一つには、文中の『叛臣伝』或いは『叛臣』についてです。良く聞き取れないまま、謀反の気持ちを表すとして「叛心」と表記しました。印刷時間の締め切りもあり、資料には「叛心伝」「叛心」と印刷して配布しました。入稿後に、友人の古林さん、山下さんからこの点に関して参考意見を貰いました。それは、水戸光圀により日本の歴史の編纂が行われた大日本史内に「叛臣伝」の項目があり、その中に平将門を列挙したことが明記されていて、「叛心」ではないとの指摘でした。

その後、ウィキペディアで調べると、「巻之二百二十八列伝第五百五十五 叛臣二」の項に平将門の名が並んでいます。

開催日当日、『叛臣』として口頭で訂正しました。二つには、討ち取られた将門の首についてです。氏の言葉では、『京都に運ばれたという説もある』それから空中から飛び帰つて来たという説もある」と語っている中で、私は『空中から』を『宮中から』と資料に表して配布しました。

しかし「宮中」の表記では、天皇の居所、宮殿の中、或いは一般的に神社の中を表すので、討ち取られた首(首級)がその様な神聖な場所に晒すのか、首級が飛んで行くとは考え難い訳です。時代は異なりますが、北斎が描いた将門の晒し首の有名な絵にも、市中の人々が描かれていて、宮中ではないと判断して、「空中」と会場で訂正しました。

ドラマ制作のエピソード

ウィキペディア(インターネット百科事典)によると平将門を描いた「風と雲と虹と」は、大河ドラマ一四作目の作品で、全五二話を主役の平小次郎将門に劇団俳優座の俳優加藤剛氏が演じました。

(記事引用)

演出を担当した大原誠によると、当初の企画は池波正太郎の小説「火の国の城」(加藤清正が題材)のドラマ化が最有力だったが、NHKの芸能局長が「加藤清正みたいに地味な人間が大河の主役になるか」と反対して頓挫する。主役にはすでに加藤剛の起用が決まっており、彼が「平将門をやってみよう」と話したこと

代替案として採用された。

NHKからの申し入れを海音寺は快諾し、同じ朝廷に対する「反逆者」である藤原純友の話を組み合わせる形でドラマ化された。タイトルは純友を描いた『海と虹』と『海』を「雲」に変えることで平将門の本拠である「関東」を表現したという。前述の古い時代設定に視聴者が近づけるよう第一話の冒頭では現在の神田明神(平将門が祭神)からスタートしており、これは一九六五年の『太閤記』が第一話の冒頭に東海道新幹線を映した前例をヒントにしたと大原誠は述べている。プロデューサーの岸田利彦によると、古い時代が舞台のため、時代考証が難しかったという。

例年、大河ドラマの出演者は成田山新勝寺の豆まきに参加する。しかし、将門を追討するために作られた寺であることもあり本作の世界観と合わないという理由から、本作の出演者は豆まきに参加していない。(引用終わり)

スタッフは、原作が、海音寺 潮五郎、脚本：福田善之、演出：大原誠・松尾武・重光亨彦、岸田利彦、榎本一生。

音楽：山本直純、製作総指揮・制作：小川純一・関谷雅行、語り：加瀬次男アナウンサー。

他に主な出演者は、男優では、平太郎貞盛・山口崇田原藤太・露口茂、源護・西村晃、興世王・米倉斉加年、藤原純友・緒形拳、父平将良・小林桂樹、平国香・佐野浅夫、平良兼・長門勇、平良文・渡辺文雄、平良正・蟹江敬三、源扶マモル、峰岸徹、伊和員経・福田豊土、三宅清忠・近藤洋介、藤原忠平・中谷昇、鹿島玄明・草刈正雄、鹿島玄道・穴戸錠、武蔵武芝・宮口精二、山田康雄らが固めています。

女優陣は、貴子姫・吉永小百合、妻良子・真野響子、源護の娘小督(コゴウ)・多岐川裕美、貴子の乳母・奈良岡朋子、虻蛄(ケラ)・吉行和子、千載・五十嵐淳子、美濃・木の実ナナ、武蔵・太地喜和子、詮子・星由里子、桔梗・森昌子、母正子・新珠三千代、定子・新藤恵美、貞盛の母秀子・丹阿弥谷津子、子春丸の妻・藤田弓子、小米・池上志乃らが出演し、当時一流の俳優陣で毎話

オープニングクレジットに名を連ねています。

平将門を演じた加藤剛さんは、二〇一八年(平成三〇年)に八〇歳で鬼籍に入りましたが、放映当時は三八歳の若さで、整った顔立ちには多くのファンを魅了したことでしょう。本紙前号でも書きましたが、私は劇団俳優座の後援会に長年会員として籍を置き、加藤剛の熟年時代の夏目漱石原作の「心」等をモチーフにした「わが愛」シリーズ波・門・心三作の舞台が特に好きでした。

また、将門の影に寄り従う鹿島玄明役の草刈正雄は、当時化粧品のモデルから抜擢されたばかりで、端正な風貌とスマートな身の熟しで人気を呼んだことでしょう。何と言っても格好良かったです。

更に目を引くのは、女優陣の溢れんばかりの美しさです。吉永小百合、太地喜和子、多岐川裕美、星由里子、新珠三千代、木の実ナナ等は、息をのむ美貌で、まさに絶頂期だったのではないのでしょうか。

余談ですが、第四四話には、お笑いのタレントシティボーイズの一人で、現在、コメンテーター・ラジオパーソナリティ・俳優の大竹まことが出てきます。武蔵国の介になった源経基の郎党で、急襲されたと経基に報告し、命を受け将門に矢を放とうとするシーンです。

テーマ曲と主題歌

テレビ放映では、テーマ曲としてオーケストラによる器楽曲(インストゥルメンタル)で主題歌は歌われていますが、脚本の福田善之が歌詞を付け、CBSソニーから出した様で加藤剛や村田英雄が歌いました。一友よ、風の様に駆けたくないか、あの雲の峰を超えて、行きたくないか

風は、時に凄く吹きささぶ、いつか君が風だ、風が君だ

行こう地の果て夢の果て、俺が死んだら大空の、大空の虹

君よ、オーラ、オーラ、オーラ、オーラ

二海は、君にとって親しい友か、波は君の夢を運んで

ゆくか

海は、風を呼んで荒れ狂う、今や君が波だ、波が君だ

行こう地の果て恋の果て、俺が消えたら海原の、海原の虹

君よ、オーラ、オーラ、オーラ、オーラ

主題歌は、少しドラマのタイトルに引つ張られた様な感じがしない詩になっています。私は歌詞の無いインストゥルメンタルのテーマ曲が、下総や筑波の荒野にタイトルを感じさせる力強い、躍動感のある曲として相応しいと思います。

ドラマを一層盛り立てるのが、役柄別のサブテーマ曲です。

吉永小百合の貴子姫が絡むときは、優雅で心ときめく印象です。

又、草刈正雄の玄明が出て来る時の横笛の音は、謎めいた何かが起る予感を感じさせます。映像は、横笛を吹いていますが、音は尺八に似ています。サブテーマ曲でドラマ展開を楽しむのも一興です。

(スタッフ・俳優の敬称略)

YouTubeでの動画視聴と著作権問題について

今回、この原稿と講演会の資料を作成するにあたり参考にしたのは、YouTubeの動画投稿サイトにアップされていた番組コピーの動画を見ました。その後違法アップロードにより動画は見られなくなりましたが、ここで著作権問題の観点を整理しておく必要があると思います。

映画や舞台は勿論ですが、ドラマを動画投稿サイトにアップロードすることは制作者の著作権侵害となります。

雑誌プレジデントの二〇一二年一〇月一五日号の村上敬氏の記事によると、著作権は著作権者に与えられた知的財産権の一種で、著作権者の許諾なく動画投稿サイトに投稿すれば、複製権(著作権法第二条)の侵害、不特定多数の人が視聴できる状態になれば、送信可能化権(同法第三三条一項)の侵害になると指摘しています。

更に、違法にアップロードされた動画へのリンクを張るのもそれによってアクセスが増えれば公衆送信権(同法第二三条一項)の侵害を幫助したとして罪に問われる可能性があると注意喚起しています。

四六年も前の素晴らしい大河ドラマですから、違法行為にならないよう、是非、適法な方法でご覧になって下さい。



さらし首に処された平将門の首級 葛飾北斎
『源氏一統志』挿絵 ウィキペディアより

特別寄稿

比羅佐藤氏の由来

佐藤 重孝

法雲院釈生宗

先祖佐藤伊賀守藤原朝臣直友

南無阿弥陀佛

抑当家ハ清和源氏ノ末流ニシテ遠ク天慶ノ古天下ノ名將トウタワレタ藤原武藏守秀郷侯ガ六代ノ後胤相模守公清ニ発シ当地比羅佐藤氏ノ統領タル家系ナリ古代々京ニアリテ院ノ御所ニ仕立左衛門尉タリシト而ルニ伊賀守次郎直友ノ世忠仁ノ探題大友氏ノ家臣トナリ御同紋衆ノ重席ニ列シ寒田城主大友重国公ノ定ニ依リ西寒多神社社家ヲモ兼ネタリ又当地二代目ノ時隣地ニ舎弟ヲシテ分家ヲ興サシム之即

チ西福寺ノ祖ナリ其ノ後モ家運ノ隆昌ト共ニ次々分家を興シ一族大ニ繁栄シタリ
而ルニ大友家ハ二十二代義統公ノ世ニ滅亡当家モ又主家ト運命ヲ共ニシ野ニ下ルモ新藩主ヨリ由緒アル家名ヲ惜シマレ代々槍一筋ニ苗字帯刀ヲ許サレ寒田村辯差ト組頭ヲ命ゼラレ明治ニ至ルマデ寒田村治政ニ大ニ貢献シタリ憶ヘバ遠ク忠仁ノ古ヨリ星霜ヨリ三四百八十有余年栄枯盛衰ト共ニ此ノ地ニ残セシ一族ハ実ニ二百六十余人ニ及ビ墓所ハ当初向津留山ニ在リシガ十一代源右衛門重泰ノ世由緒深キ郷ノ城頂上ニ移転セシヲ更ニ此ノ所ニ移シ此ノ碑ヲ建立シ永代墓所ト定ムル者也

合掌

九州は大分県大分市に寒田(「そうだ」と読む)という町がある。JR大分駅から国道十号線を十キロほど南に下った辺りである。この地には国幣中社豊後国一之宮西寒多神社(ささむたじんじや)と法雲山西福寺とがあり、古くから市民に親しまれてきた。西福寺も古刹で、永正十七年(千五百二十年)の開山と記録されている。開祖は大友家家人であり、比羅佐藤氏二代目の弟でもあった釋道因である。この寺が「比羅佐藤氏」の菩提寺でもある。前掲の碑文は、この西福寺の墓地にある比羅佐藤家の先祖墓の台石の三面に刻印されているものである。

「比羅佐藤氏」の由来については、中臣鎌足(藤原鎌足)に始まる藤原氏の発祥から、藤原秀郷(倭藤太)を経て、藤原公清(佐藤公清)に至るまでの家系の流れは、「尊卑分脈」(十五世紀初頭に編纂完成された諸家の系譜大成)、「大織冠伝」(藤原鎌足伝)ともいわれ、鎌足の曾孫藤原仲麻呂の著とされる。その他幾つかの歴史参考文献が残されている。以下、その流れを紐解いてみたい。

「藤原氏」の発祥

ときは今から約千三百九十年ほど遡る。場所は奈良の飛鳥の都、第三十五代皇極天皇の御代で中大兄

皇子が皇太子であった。この皇子を補佐する立場にいたのが三十歳になったばかりの中臣鎌足(生六百十四年、没六百六十九年、「鎌子」ともよばれる)であった。中臣鎌足は、常陸国一宮現在の茨城県鹿嶋市)と呼ばれる鹿島神宮の氏子であり、更に、下総国一宮(現在の千葉県香取市)と呼ばれる香取神宮の祭祀を務める家に生まれたといわれる。二十代の頃、奈良飛鳥の都へ上り、中大兄皇子の側近となった、と伝えられている。

当時、朝廷では、蘇我蝦夷が自らの血縁関係にある女を朝廷に嫁がせ、朝廷との姻戚関係を背景にして政治の実権を握り、天皇を凌ぐほどの専横を極めていた。中大兄皇子は、中臣鎌足、蘇我倉山田石川麻呂らと謀り、六百四十五年六月十二日、蝦夷の子蘇我入鹿を暗殺する(「乙巳の変」と呼ばれる)。父親の蘇我蝦夷はその翌日館に火を放ち自害、栄華の頂点に立っていた蘇我一族の本宗家は滅びてしまう。

中臣鎌足は、その後二十年以上にわたり皇子を補佐し、「大化の改新」と呼ばれる政治改革を進めてゆく。六百六十八年、中大兄皇子は、第三十八代天智天皇として即位する。その翌年の六百六十九年、中臣鎌足は五十六歳の生涯を閉じる。天智天皇は、鎌足の死を悼み、その功績を讃えて鎌足に「大織冠」(官位制度の中で最高の官職、後にも先にも鎌足以外の受任者はいない。)という最高官位と「内大臣」という官位を贈り、併せて、中臣家ゆかりの地大和の地名「藤原(奈良県橿原市)」を氏として与えた。「藤原氏」はこうして始まったのである。

藤原四家

中臣(藤原)鎌足には二男四女がいたとされている。長男貞慧(生六百四十二年、没六百六十六年)、次男不比等(生六百五十九年、没七百二十年)である。長男貞慧は若千二十三歳で他界している。このため、藤原家は次男の不比等によって受け継がれることとなる。不比等には、長男武智麻呂(生六百八十年、没七百三十七年)、次男房前(生六百八十一年、没七百三

十七年)、三男宇合(生六百九十四年、没七百三十七年)、四男麻呂(生六百九十五年、没七百三十七年)がいた。鎌足を祖として実質的には不比等に始まった藤原氏の繁栄を予測させる藤原四家のスタートであったが、それも束の間のこと、七百三十七年の夏から秋にかけて天然痘が猛威をふるい、わずか四ヶ月ほどの間に多くの人命がその犠牲となり、不比等の四人の息子も時を同じくして他界してしまうのである。

藤原北家

藤原北家の始祖房前には、七人の男子がいた。長男鳥養、次男永手、三男真楯(七百十五年、没七百六十六年)、四男清河、五男魚名(七百二十一年、没七百八十二年)、六男御楯、七男楓麻呂である。北家は、三男の後真楯流が中心となり藤原道長に代表される公家社会の道を突き進み、藤原氏の栄華の時代を築いてゆくことになる。一方、五男の魚名流藤原氏は、その後武家社会への道を歩き始め、子孫の多くは、「左衛門尉」、「鎮守府將軍」などの役職に就くことになる。

魚名流藤原氏

藤原魚名は、七百八十一年、左大臣に就く。魚名には、五人の男子と二人の女がいた。このうち五男の藤原藤成(生七百七十六年、没八百二十二年)が後に「秀郷流藤原氏の始祖」と呼ばれるようになる。

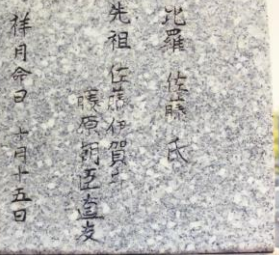
秀郷流藤原氏

藤成の流れは、その子豊澤(生没年不詳)、孫村雄(生没年不詳)、曾孫秀郷(生九百年頃、没九百六十年頃)へと繋がる。北家の始祖房前から数えて六代目となる、藤原秀郷は、別名倭(田原)藤太とも呼ばれた。秀郷の生没年は正確にはわかっていないが、九百年から九百六十年頃にかけて生存したものと推定される。秀郷は、下野国を領地とし、押領使、下野守、武蔵守、鎮守府將軍などを歴任していた。九百三十九年(天慶二年)、朝廷に対して反乱を起した平将門を下野国で誅した功績は有名である。(天慶の乱)秀郷流藤原

氏は、この後、藤原千常(美濃守、左衛門尉、鎮守府將軍)、文脩(陸奥守、鎮守府將軍)、文行(左衛門尉)、公光、公清(生年不詳、没千三十八年、相模守、検非違使)と続く。この秀郷から数えて六代目に当たる藤原公清が佐藤公清と名乗ったところから「佐藤氏」が始まる。

佐藤氏

「佐藤」の姓の所以については諸説があることは事実である。「藤原」の「藤」と「左衛門尉」の「左」からできたという説など諸説それぞれに一理はあるものの、筆者は、最も理解しやすい説として、「藤原氏の傍系として、藤原を補佐する」という意味からきたとする説を支持する。



藤原朝臣佐藤公清は相模守、検非違使を兼任していた。公清には、季清、公澄、資清、公郷の四人の男子がいた。このうち資清は「首藤」氏を、公郷は「尾藤」氏をそれぞれ名づけている。公清の子孫は、この後、数十に及ぶ系譜を残している。

その子孫からは、首藤、尾藤、竜造寺、伊藤、鎌田、小野寺、山内、後藤、池田、内藤、河北、田原、懸田等の諸氏が派生している。因みに、筆者は比羅佐藤家第二十二代当主佐藤龍二の兄である。

合掌

令和四年春

今回特別に寄稿して貰った本稿は、佐藤氏が平将門シンポジウムの司会をした当会会員の芦崎さんのご友人で、以前から自分のルーツを調べた時に平将門を討ち取った田原(倭)藤太に繋がる佐藤一族の系譜とこので、以前に起こした論文に手を入れたものです。

職歴：大手重機メーカー勤務を経て、外資商社へ転身、

法務担当役員

趣味：ゴルフ、釣り、ドライブ、旅行、読書他

特別寄稿

志賀直哉小説『雪の日―我孫子日誌』の

Fさんは誰だろう？

〜藤井福一と舟木重雄

竹下 賢治

志賀直哉(以下、志賀)の作品にはインシヤル表記の人物が多く登場する。特に我孫子時代に書かれた『和解』と『雪の日―我孫子日誌』(以下『雪の日』)はその典型といえよう。

『雪の日』は雪が降った日の身边に起こった出来事を日記あるいは写生風に表現した作品である。特に手賀沼(の)の枯草の穂に雪を頂く描写場面は印象深く、志賀自身、後に愛着のある思い出深い作品だと云っている。父との和解の後に到達した調和の精神が自然描写の中に活かされている。

『雪の日』に登場するインシヤル表記の人物の一人、Fさんに興味を持った。以下が登場場面である。

「橋本君と一緒に上京して今日は多分帰るまいと思つて居たFさんが、頭から肩掛けを被つて一人で帰つて来た。橋本君は柳の家へ寄つたと云ふ。(中略)十二時頃橋本君とFさんは上の家へ歸つて行つた。」「雪の日―我孫子日誌」(一九二〇年二月執筆、発表より)

この文から、Fさんについて少なくとも三つの事が見えてくる。

1. 橋本(橋本基)には君を添え、Fにはさんを添えている。柳(宗悦)にはそうした尊称・敬称はないところからFさんは特別な存在なのだろう。
2. 今日は多分帰るまいと思つて居たFさん、とあることから東京にも帰るべき家があるようだ。
3. 上の家歸つて行つた橋本君とFさんから二人は志賀邸の上の家(二階の家)に住んでいるようだ。

注目すべきは「上の家」である。我孫子時代の志賀の人間関係を識る上で、「上の家(二階の書斎)」は重要である。書斎ではあるが、立派な一軒家である。志賀を

慕う若い文士たちが集い
文芸論を、時を経て若い
画家たちが美術論を語
り合った空間である。奈
良高畑サロンに匹敵する
いわば我孫子サロンと云
えよう。志賀時代には橋
本基（日本画家の橋本雅
邦の末子。美術評論家。
後に志賀と共同で画集
「座右宝」を編集・発刊）。

木下検二（後の大洋ホエ
ールズ初代社長）。高橋
勝也（志賀の義母浩の
甥等が滞在あるいは訪問し、回覧雑誌を作り共に研
鑽に励んでいた。Fさんもその一人だったのでは。

志賀が去つてからは画家の原田京平が志賀邸に入り、
上の書斎には中出三也・甲斐仁代が住み、三岸好太
郎・後の三岸節子が訪ねている。京平の妻睦も画家で
あった。

Fさんは誰なのか？...

志賀の日記や書簡から二人の人物が浮かんでくる。
藤井福一と舟木重雄である。

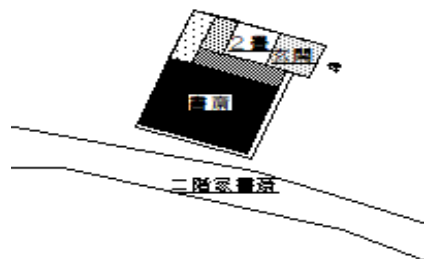
【藤井福一】

藤井福一（以後藤井）は志賀が尾道時代に出会った
作家志賀の青年で、志賀が一九一三（大正二）年に執
筆し、一九一七（大正六）年『讀賣新聞』に発表した「或
る親子」に藤井の作品の一部が採用された。

冒頭の一文に「尾の道で知合いになったFの書いた物
の一節」とある。

『續創作餘談』によると、「これ（或る親子）は作品に
もさう断つてあるやうに私の書いた物ではない。尾の道
で知り合ひになり、二十何年経つた今も時々會ふ藤井
福一と云ふ人の書いた長いものから私が勝手に載り取
つたもので…」とあるやうにFは藤井だとわかる。

志賀が我孫子時代に書いた「雪の日」に登場するFが、



藤井その人ではないだろうか。それを知る一番の手掛
かりは志賀の日記なのだが、「雪の日」執筆前後の日記
は見つかっていない。しかし、志賀が我孫子を去る一年
前からの日記に藤井は登場している。

大正一一年一月九日（発信）椿と藤井へガキ、（受信）

椿（書のこと）藤井（原稿）

一月十日：足助、小峰、中根、兒島

直三、藤井等へ手紙を書く、

一月二二日（発信）梅原、足助、藤井、小峰

中根

大正一二年一月二二日：藤井、白井来る、

二月一〇日：藤井来てゐる、（中略）五時ま

で藤井と話す、藤井の話退屈
す、木ノ檢の話よく行き由、

二月二一日：藤井と豊次郎終列車にてかへ
る、

志賀は藤井から送られてきた執筆原稿を読み、そ
の批評を返信したのだろう。一年後、藤井は直接志賀
邸を訪ね、指導を受けている。一泊しているが、二階の
書斎に泊まったのだろうか。翌日の終列車で帰つてい
たが、終列車で帰る程の近距離に住んでいたのだから、
推量するに、「雪の日」執筆以前の間もない頃に志賀邸
にしばらく滞在していたが、やがて終列車で帰る程の
近距離に居を持ったのではないだろうか。

志賀一家はこの年三月二日に我孫子を發つて京都に
住むことになる。

奈良高畑時代の日記にも藤井は登場する

昭和一三年一月五日：藤井福一來る ルートゲーム

を子供に持つて来てくれる、直
吉大いに興味を持つ、

一月二二日：藤井来る、

一月二六日：夜藤井来る、

三月一五日：夜藤井、木村（三和）北村来る、

志賀はこの年の四月に東京に転居する。前々年に直
吉を、昨年には妻子四人を東京に移し、この年の四月

に娘二人と共に東京に移住した。

左の写真は一九三八（昭和一三）年、東京に転居す
る志賀のお別れ旅行での記念写真である。志賀の右隣
に藤井が写っている。志賀の東京移住を知り、高畑を
来訪したのか、そのまま滝井孝作の家あたりに止宿し
たのだろうか...

藤井は我孫子時代以降、事あるごとに志賀の身近に
いたようだ。

以上の点から「雪の日」のFさんは藤井福一だと思っ
たのである。



写真⑪『志賀直哉全集 第14巻』所収写真
前列左から岡田襄 杉本捷雄 湯浅那羅 直哉 藤井福一 兵本善矩
中列左から橋本聖準 清水公照 松井治 松田清春 前川佐美雄 明珍恒男
後列左から筒井英俊 阪中正夫 上司海雲 小川晴暘 新井完 奥田勝

【舟木重雄】

ところが、ここにきてFをイニシャルとする別の人物
が浮かび上がってきた。舟木重雄である。自然主義系
の作家で、一九一三（大正二）年三月に志賀作品の批
評を発表したことで七月に志賀が舟木を訪ねている。

志賀と藤井が出会う(同年一月)数か月前の事であった。

二人の交流はその後、我孫子時代を経て、奈良時代、東京時代と長く続いていくことになる。書簡でのやりとりが頻繁に見られるが、「雪の日」発表の前年一九一九(大正八)年一〇月六日投函の舟木宛志賀の葉書の末文に「その内お會ひしたいと思ひます」とあり、同年一月三日には「正月號澤山約束して今月は忙しい事です。然しお訪ね下さる事は喜びます」とある。

一月三日は「雪の日」発表のほぼ三か月前である。この間に、それも多忙な志賀の仕事が一段落した年明け以降に舟木が我孫子志賀邸を訪ねていることは容易に想像される。

舟木の住所は「東京市外代々木富ヶ谷(現渋谷区富ヶ谷)」であることから、「今日は多分帰るまいと思つて居たFさん」というのも理解できる。こんな大雪の夜は我孫子に帰るよりも自宅に帰る方が道理に適っているからだ。

この後、舟木は奈良高畑に移った志賀を追いかけて移り住み、高畑サロンの一員になる。近所に滝井孝作や九里四郎も住んだ。

以上の点から「雪の日」のFさんは舟木重雄だと思われるのである。

インシヤル表記について(「君と、ーさんの違い」)

「雪の日」に登場する主な人物は、K君(木下検二)、橋本君、Fさんである。橋本君と同居しているのにFさんと敬称を変えている。広辞苑には「君」同輩や同輩以下の人の氏名の下に添える語「さん」丁寧という時につける」とある。舟木宛の書簡からも謙譲の思いが伝わってくる。「留女」や「クローディアス」の日記の評を書いてくれた舟木に感謝と敬意を抱き続けているのだろう。

一方、藤井には「尾の道で知合いになつたFの書いた物の一節」と敬称を付けていない。

Fさんはやはり舟木重雄なのだろう。

【追記】

※『或る親子』・『和解』(九)に「郵便局員の書いた二百枚近い長い物から勝手に自分で抜いて…」とある。

郵便局の同僚である美しい電話交換手との結婚の許しを両親に乞う場面を抜き取って二つの作品にしたものが『或る親子』であり、この郵便局員が藤井福一である。

※舟木重雄(一八八四〜一九五二)広津和郎・葛西善蔵らと同人雑誌『奇跡』を創刊。志賀は一九五四年に「舟木重雄遺稿集」を自らの手で出版発行している。



昭和初期の奈良高畑界隈(高畑サロン関係の住居地図)
中央道路の右側両脇に滝井孝作、舟木重雄、九里四郎の住居

放談くらぶ 講演報告

「アーネスト・サトウという人がいた」の講演を聴いて

明治初期、日本で活躍したアーネスト・M・サトウは、外交官として有名だが、彼は第一級の日本研究者「Japanologist」でもあり、日本の古典籍の真価を最も早い時期に正しく認識した一人で、多くの研究論文を遺した。最も価値ある論文は、明治二十一年ロンドンで出版した「日本耶穌会刊行書誌」である。

当日配布された資料によると彼が日本に来たときは十九歳、日本語は全く知らなかったという。それが二年もたたぬうちに完全に日本語を習得してしまい、毛筆も御家流(おもに武家の公式文書に使われた)と唐様(江戸時代の学者間で流行した中国風の書体)の二通りを書いた。よほど頭脳明晰、語学の天才、勉強家だったのだろう。

我が国では一五九〇年から二十年の間に、ポルトガルから持ち込まれたプレス印刷機(活版印刷機)を駆使した書籍が刊行されていた。それらの書籍はローマ字、漢字、カナで書かれ、イエズス会宣教師が基督教の布教や自身の日本語習得のために刊行したもので、後に「ギリシタン版」と呼ばれた。アーネスト・サトウの論文により明らかにされたこれらの書籍「ギリシタン版」は当時の話し言葉で書かれていたこともあり、これを機会として言語学者を始め、書籍コレクターの「ギリシタン版」探しが勃発した。徳川時代の徹底した基督教弾圧で、廃棄尽くされた稀覯書(きこうしょ)世間に流布することまれで、珍重される書物)の最たる書籍となつてしまひ、現在、三十二冊のみが確認されている。講演者の原田氏が勤務していた「丸善」では昭和六年に「ぎあどべかどる」を購入、また昭和二十七年には「コンペンデウム・スピリチュアル・ド・チエリーネ」の二冊の「ギリシタン版」を購入し、いずれも特別展示会を開催した。活版印刷機が日本に持ち込まれた時、同時に西洋の活字も持ち込まれた。西洋文字はアルファベット26文

字であるから日本語を印刷することができない。一方朝鮮から渡来した銅活字による漢字と日本独自のカナの使用で、その後日本語、漢字も活版印刷機で印刷されるようになった訳である。

ところで現在、日本での印刷物は活版印刷の他にコンピュータ(パソコンを始めとした多くの機種)による印刷物を目にする事ができるが、日本語(カナ、漢字)がコンピュータで印刷出来るようになるのは昭和四十年後半から五十年にかけてのことであり、この時期に大きな技術変革があった。当時、日本でのコンピュータによる日本語処理の開発・発展に多少携わったことがある私は今回の講演を聴きながら当時の記憶がにわかに蘇った。明治時代、活版印刷機で日本語が印刷されるまでの経緯はコンピュータによる日本語印刷までと同じ経緯を辿ったのではないかと思つたのである。

昭和四十年代米国から輸入されていたコンピュータ(当時国産コンピュータは未開発、研究中)はアルファベツト(？・・・などの特殊文字含む)しか打ち出されなかった。例えば当時私が受けた給与明細の氏名欄はローマ字表記だった。当時のコンピュータに繋がるプリンター(印刷装置)は活版印刷機と同様に活字と同じような大きな違ふアルファベツト文字の何種類かを含めた固形の文字を備えていた。一方、コンピュータでカナや漢字を印刷するには膨大な(カナ47文字、漢字は数万〜数十万とも)数の固形の文字を持たねばならず、当時は不可能と考えられていた。その後ハード面では記憶素子(メモリー)が安く大量に生産できるようになり、パソコンの急速な発展もあった。また、ソフト面では漢字入力方法の革新や文字フォント(文字形)を固形(活字)ではなくメモリーに貯えられる(記憶すること)ができるようになった。具体的にはひとつの文字を例えば縦横24×24点(のドット)の集まりで表示するのである。後には32×32になるなど文字の精度は向上した。コンピュータと言えばアメリカで開発、発展したものであるが、こと日本語処理に関わる技術、ソフトの開発はアメリカ人では出来ず、日本人による独自の技術革新によるものであった。

それまで国や都府県、市町村、保険会社などでコンピュータ内にアルファベツト(一時、カナの時もあった)で記憶されていた個人の名前や住所を漢字に変換するにはOCR(オプティカル)印刷された文字を光学的に読み取り変換するなどの方式はあったものの基本的には手作業で入力するしかなく膨大な時間とマンパワーを必要とした。

今ではパソコンで漢字が印刷されるのが当たり前だが、当時、膨大なデータの変換作業には縁の下の大きな力が働いていたのである。(T・M)

あびこだより100号

『我孫子宿 水戸道・成田道「追分」の保存活動について』

保存会 関口 一郎

多くの皆さまのご支援を得て、標題の事業は終わりに近づきました。3月の初めでは、まだ道標がグラフィック、不安定で台座に載せられないなどの細かな点の工事は続いています。

今回の件は、歴史好きの市民が、住まいの近くで放置されていた、以前から気になっていた史跡ともいえるべき歴史ある場所を、あることをきっかけに行動を起こしたお話です。

近年、歴史的な場所や事物の保存とその活用については国からの呼び掛けもあり、文化庁や地域行政でもその検討が進められています。これは国の観光立国への整備などとの関係もあると思いますが、歴史を大切にすることについては大賛成です。

今度の事業がそんな大層なことから始まったのではないのですが、いわば「文化財保存活用」のミニ実証実験の一つかもしれません。いずれにしても多くの皆さんの共感と協力がなければなしえないことでした。そうした市民の「チカラ」を多くの人に知っていただければ幸いです。みなさんの住まいの近くにも、そうした場所はあるのではないかと思います。

(プロジェクト報告)

百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

今月の歌恋の歌その12)

風をいたみ 岩うつ浪の おのれのみ

くだけて物を 思ふころかな

(48)

【現代語訳】

風が激しくて、岩に打ち当たる波が砕け散るように、私だけが心も砕けんばかりに物事を思い悩んでいるこの頃だなあ。

【語句】

【風をいたみ】「いたし」は「甚だしい」という意味の形容詞。【岩うつ波の】岩に打ち当たる波の」という意味で、ここまでが序詞。【おのれのみ】「自分だけ」。【砕けて】「くだけ」は「くだく」の連用形で、微動だにしない岩にぶつかって砕ける波と、振り向いてくれない女性に対して思いを砕く自分、という意味を重ねている。

【作者】

源重之(みなもと)のしげゆき。生年不詳、1003年頃、清和天皇の曾孫(ひま)で三十六歌仙のひとり。冷泉天皇の時代に活躍し、天皇の東宮時代に帯刀先生(たちきはきのせんじょう)、即位後は右近将監から相模権守(さがみのごんのかみ)に出世した。

普通砕けてしまうのは、女性の心と思いがちだが、ここで千々に思い悩むのは男性の方。「砕けてものと思ふころかな」は、よく使われる恋の悩みの表現。ありきたりだが、序詞で風の海的情景を詠み込んだことで、陳腐な恋の言葉が劇的な名歌に姿を変えてしまった。

関連狂歌

花みんともちしささへをぶちおとし

くだけてものをおもふころ哉

注「ささへ」は酒を入れる竹筒。

関連川柳

おのれのみくだけと思ふ焼継屋

注：焼継屋は割れた焼物を継ぎ合わせるのが商売。

第三十三回短歌の会(最終採択の一首)
一月二十五日実施

波蹴立て進み行くヨット若き日の
夫の勇姿験の奥に

村上 智雅子

手焙りという言葉なつかしドアノブも
手ふるるものみな冷たくて

納見 美恵子

看取りの日そひ寝のおもひ遂げられず
手摺り冷たく身にしみ悔やむ

佐々木 侑

コロナ禍は楽しむ時と思い立ち
牧水歌集に心遊ばす

飯高 美和子

寒空を飛ぶが如くに子の神の
新たな年を告げる鐘の音

芦崎 敬己

「好き」という言葉聞かねば分からぬと
君は欲張り?それとも鈍感?

美崎 大洋

長き頸^{くび}後ろにたたみ白鳥は
深き呼吸のままに動かず

伊奈野 道子

早朝のひそけき^と外の面雪^もは積み
足跡はやも解けゆく早春

大島 光子

ペストはやり村にこもりてニュートンは
万有引力見出でたりけり

三谷 和夫

文学掲示板

令和四年五月展示作品(文学の広場)

船頭の乗りたる如く花筏
流れにのりて追いつ追われつ

八千代市 藤川 綾乃

幾重もの花卉の重みに傾ぎつつ
なほ気品あり牡丹の花は

我孫子市 美崎 大洋

千年をいのちつぎ来しこの桜
なだれ咲きたり滝の如くに

我孫子市 村上 智雅子

盲目の人は小鳥を抱くごと
桜ひと房掌に包みたり

柏市 納見 美恵子

君逝きし日のままの道悼み来て
今年も群咲くムラサキケマン

我孫子市 佐々木 侑

ひとり居を庭に書を読む幸せを
遊ぶ雀に告ぐる春の日

我孫子市 飯高 美和子

当会の行事予定

□「放談くらぶ」

日時 4月24日(日)14時〜16時

会場 あびこ市民プラザ会議室1

講師 関口一郎氏(保存会)

演題 「我孫子宿 水戸道・成田道「追分」の

保存活動について」

(11ページ「あびこ」より100号「参照ください」)

◎参加費、会員無料、非会員三〇〇円

申し込みTEL:七二八五〇六七五 佐々木まで

□プロジェクト「短歌の会」

第三十四回短歌の会

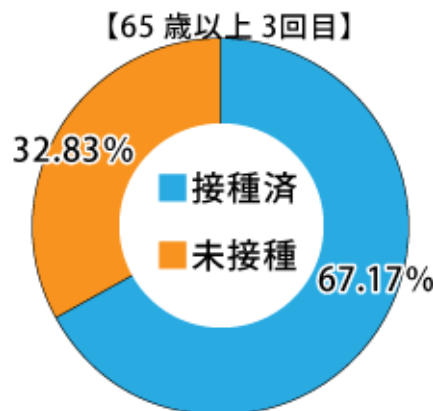
日時 3月22(火)13時30分

場所 けやきプラザ10階小会議室

我孫子市 新型コロナウイルスワクチン接種状況

3回目(令和4年3月1日時点の速報値)

年齢	対象者数	接種者数	率(%)
18歳以上	111,571	36,248	31.92
65歳以上	40,464	27,181	67.17
18〜64歳	73,107	9,067	12.4



編集後記

「平和の祭典」北京オリンピックの終了を待って
いたかのようにウクライナ侵攻が始まった。東西冷戦後の
世界の秩序をぶち壊す暴挙だ。かつての東西の冷戦は社会
主義諸国と資本主義諸国の対立だったが、その原因はイデ
オロギーだった。今回はプーチン主義というイデオロギーと
国際社会の対立ともいえるのではないかと▲失業率が高く、
自殺者も多く、一家離散など悲惨な事態がロシア中で繰り
広げられていた時代を知る世代にとつて、プーチンは「国を
立て直し、超大国ロシアを復活させる救世主」だが、30歳
以下の若者は超大国だったソ連という時代を知らないため
プーチンに対する熱狂的な支持者は少ないという▲プー
チンは「奪われた土地を奪い返すだけだ」と言う。「盗人
猛々しい」が「盗人にも三分の理」なのか。決して「無理が
通れば道理引つ込む」という結果にはならない。(美崎)